

榎文彦の求めたモダニズムの美学と倫理

代官山ヒルサイドテラス 一九六九〜九二年

文・写真 松隈洋「神奈川大学建築学部教授」

人の生は儚く永遠ではない。この日が来ることは予期していたものの、現実を前に言いようのない寂しさに茫然となる。二〇二四年六月六日、榎文彦氏が老衰のため亡くなられた。享年九五歳。天寿をまとうされたと納得しながらも、最後まで元気に活動されていたので、現役のまま静かに休息を取られたのだと思いたくなる。最後にお目にかかったのは、コロナ禍の続く二〇二〇年十月三十日、榎がデザイン監修を務め、この年の五月に

竣工した横浜市役所のアトリウムで行われた「M meets M」と総称された二つの建築展《村野藤吾展・榎文彦展》の合同オープニング・セレモニーの席である。この展覧会は、村野の手がけた旧庁舎（一九五九年）から新庁舎への機能移転を受けて開催された。残念ながら、出席者全員がマスクを着用し、副市長と榎、村野展に協力した筆者が挨拶するだけのささやかな会となったが、九二歳の榎が元氣な姿を見せ、村野の遺族らと歓談す

東側の今はない歩道橋から見る第一期の外観
二〇一〇年



第十七回日本建築家協会「五年賞」の現地審査で
二〇一七年十月十三日 撮影/田村誠邦



る光景もあった。榎は、挨拶の中で、生前に交流のあった村野に対する敬意の言葉を述べた上で、新庁舎が建つ「みなとみらい地区」の都市デザインとの関わりについて熱く語っていた。その発言に込められた思いは、新庁舎の竣工に合わせて出版された最後の著書『アーバニズムのいま』（鹿島出版会）の「選書」から伝わってくる。「あとがき」には、「アーバニズムに未来があるとすれば、それはヒューマニズムの建築、都市観に基づくものであろうと考えている。（…）過去半世紀以上、ヒューマニズムの建築、都市観は私の建築家としての生涯の中で、つくる、書くという建築家活動の一貫した核であったことは鮮明である。」と綴られる。また、本文は、こう締めくくられていた。

「文化の本質は無償の愛にあるのではないかと感じた。（…）我々建築家に与えられたプログラムは、施主の要求する有償の愛である場合が多い。その与えられた条件の中からいかに無償の愛に近づけるかが、建築家に与えられた社会的責任なのではないかと思う。それがヒューマニズムの建築、ヒューマニズムのアーバニズムの目的なのではないだろうか。」

縁あって筆者は、さまざまな機会にご一緒し、多くの教えを受けてきた。はじめて会ったのは、前川國男事務所に入所した遠い昔の一九八〇年春、二学年後輩の学生だった小嶋一浩らが京都大学に榎を呼ぶ学生主催の講演会を企画し、その依頼にうかがう際の後見人として同席したのである。榎

が東京大学教授に就任した翌年だったので、「東大の学生はどうですか」とお聞きしたら、「野蛮な学生がいないね」と笑顔で返された。余談だが、この後、小嶋は原弘司に講演を依頼したことがきっかけで東京大学大学院原研究室に進学し、そこで出会った仲間たちとシラカンスを結成する。榎とは、時を経た二〇〇五年前川國男展、二〇一三年丹下健三展、二〇一四年谷口吉郎・谷口吉生展、二〇一六年大高正人展を通して親しく接する機会が増えていった。

さて、そんな交流を振り返りながら、この著書の結語を読み直すとき、ふたつの出来事に対する榎の「無償の愛」に支えられた行動力と真摯な発言が思い起こされる。一つは、二〇一一年十二月、前川國男の京都會館の取り壊し問題の最中に、有志で開催したシンポジウムに手弁当で駆け付け、自らの建築が竣工後に遭遇した天国と地獄の運命を、ユーモアを交えて語り、建築が社会で共有されることの大切さを語る姿である。もう一つは、二〇一三年八月、新国立競技場の建て替え問題の際、東京都体育館（一九九〇年）を手がけた経験を元に、風致地区として守られてきた明治神宮外苑の景観を破壊する建設計画に対する異議申し立ての意見表明をした単独の行為である。八五歳の榎がなぜ声を挙げたのか、温厚な人柄からは想像もできない闘志に驚いた人も多かったに違いない。しかし、心の底にあったのは、次のような都市空間に対する願いだった。

「都市のパブリック・スペースとはその場所、規模、性格のいかに関わらず、独りの人間にとって、時に安らぎ

と、また時に感動を与えるものでありたいという願望は常に存在し続けているという認識を放棄してはならない。』（『新建築』二〇〇八年一月号）

同じ文章に、世界各地の都市を訪ね歩いた経験から得た結論として、「独りのための素晴らしいパブリック・スペースとはまた多くの群衆が集まった時にも素晴らしいスペースである」と綴られている。そして、都市が等しく「独りの人間」に居場所を与えるために建築に求められるのは、「優しさ」であると指摘していた。そして、そのことを自らの美学と倫理に基づいて実践したのが、代官山ヒルサイドテラスだったのだと思う。

ここに掲載する写真は、二〇一七年、奇遇にも日本建築家協会「五年賞」の審査員の一人として現地視察した際のものだ。榎が自ら全館をくまなく歩いて案内し、最後は事務所ヒルサイドウエストにも招いてくれた。一九六九年の第一期から一九九二年の第六期と、一九七九年のデンマーク大使館、一九九八年のウエストまで、三〇年及以上持続的な街づくりによって創り出された合計十二棟の群造形の姿を、慈しむように見つめる眼差しに、建築の社会性に対する矜持を感じずにはいられなかった。日本における最初で最後とも思えるアーバン・デザインを志した建築家、榎文彦が守り育てようとしたものとは何だったのか。わずかな時間だが、交流の機会を得た者の一人として、遺された仕事の意味を繰り返し噛みしめながら、少しでも次世代へ伝えられたらと思う。謹んでご冥福をお祈りします。榎さん、ありがとうございます。